

特集
島根
～神々の国の「田舎」づくり～

Special Features
Shimane
Constructing "pastoral districts" in the kingdom of the gods

島根の姿

Image of Shimane

島根らしさ

～出雲・石見・隠岐の歴史と風土～

藤岡大拙

FUJIOKA Daisetu

荒神谷博物館/館長



1——山陰

律令制の地方行政区画の一つとして定められた山陰道は、丹波から石見まで、日本海と中国山脈に囲まれた細長い地域である。中央からさして遠くないのに、交通の不便さや地理的な孤立性のために、感覚的に僻遠の地と見なされてきた。

山陰といえばすぐ、陰鬱な空、低くたれこめた雲、冷たい季節風、鉛色の海、荒々しい波、絶え間ない時雨、などなどという暗いイメージでとらえられがちである。だが、山陰は本当に暗いのだろうか。少なくとも「陰気な晴れやかでない」といった辞典的意味での暗さはない。石見出身の作家田畑修一郎は『出雲・石見』の中で次のように言っている。「全体としていかにも暢びやかで明るい。そして柔らかい。ただ、その明るさは山陽道、瀬戸内沿岸のそれとも異なる。明るさの中に、一脈の暗さが走っているのだ」。まことに言いえて妙である。山陰の暗さは決して陰湿なものではなく、明るさの上に微かにおおう暗さなのである。

島根県はその山陰道の西端に位置し、出雲・石見・隠岐の三国より成りたっている。東西は直線距離にして約180km。それに対し、南北はもっとも幅の広いところで約60kmにすぎない。この三国は、近代以前にほとんど交流らしいものを持たなかった。別々の歴史を歩み、別々の風土を形成してきた。戦国末期に成立した諸国評判記である『人国記』にも、三者三様の記述がしてあり、共通事項は見えない。もし、共通点があるとすれば、ともに僻遠の地にあること、日本海が岸辺を洗い山陰特有の気候であること、くらいだろう。むしろ、相違点ばかりが目につくのである。

三国は言葉も違う。とくに、出雲と石見は顕著である。現在の大田市にある三瓶山を境とする雲石国境で画然と違う。そのことは、人間も、経済も、文化も、相互の交流があまりなかったことを端的に物語る。隠岐は中世以降、出雲の守護が守護職を兼務することが多かった。江戸時代、隠岐は天領に編入され、松江藩の預かり地となり、藩の代官の支配下に入った。つまり、出雲や石見と隠岐は、支配と被支配の関係にあったのである。

このように、三国はそれぞれの歴史、風土、文化を形成してきた。今、「島根らしさとは何か」と問われても、明快に答えを出すことは難しい。とりあえず、それを考える手がかりとして、出雲・石見・隠岐三国の特徴を述べてみることにする。

2——閉鎖的な出雲

出雲は神々の国と言われる。『出雲国風土記』には399の神社をあげ、『古事記』『日本書紀』（『記紀』）の神代の



■写真1—出雲大社の現本殿は、江戸時代の延享元年(1744年)に造営されたもので、それ以後3回の遷宮が行われており、この平成20年からは、「平成の大遷宮」がはじまる。平成20年の4月20日に、仮殿遷座祭がおこなわれ、平成25年に本殿の修理が終わる予定である



■写真2—荒神谷で銅剣358本が4列に並んで発掘された。これだけの数の銅剣が、整然と埋められたままで発掘された例はなく、奇跡の発見ともいわれる。翌年、銅剣から7m離れて発掘された銅鐸6個、銅矛16本とともに、平成10年には一括国宝に指定された

巻には、たくさん出雲神話を載せている。国引き、黄泉の国、ヤマタノオロチ、国譲り等々。まことに、出雲国は神話の国、神々の国である。とりわけ、『出雲国風土記』の冒頭を飾る国引き神話は、大和の史官たちの改竄の手をへないで、古代出雲人の伝承がそのまま載っていると考えられる。その壮大さ、躍動性は、感嘆以外に述べる言葉を知らないほどだ。国引き神話の背後には、きっと古代出雲の繁栄があったに違いない。

そのことは、荒神谷遺跡における大量の青銅器の発見などによって、近年動かしがたいものとなった。昭和59年(1984年)夏、宍道湖西岸の町、斐川町の荒神谷から358本の銅剣が発見された。数量が驚異的であるばかりではなく、不思議なことに、整然と4列に並べられ、しかも、使用された形跡もなかったのである。翌年夏には、銅剣出土地の近くから、今度は銅矛16本、銅鐸6個が発見され、再び大きな話題を呼んだ。誰が埋めたか、何故埋めたか、何処で作られたか、荒神谷の謎は今もほとんど解明されていない。続いて平成8年秋には、荒神谷から南東約3kmへだたった山の向う側、雲南市の加茂岩倉から、39個という驚異的な数量の銅鐸が発見されたのである。

しかし、出雲の繁栄は長くは続かなかった。やがて、

吉備や大和の勢力によって征服される時がくる。そのことは、『記紀』の国譲り神話や『崇神紀』60年の条の出雲振根の敗死などによって推定できる。かくして出雲は、その後の歴史において、再び表舞台に登場することはなかった。国引き神話を謳いあげたバイタリティあふれる古代出雲人は、貝殻に閉じこもって、物言わぬ民となった。出雲人の気質が、温和で消極的、閉鎖的であるのはそのためであろう。

だが、出雲人はかつての輝かしい栄光への誇りを失わなかった。また、閉鎖世界の中であって、微かな変化をも敏感にとらえる鋭い感性を養ったのである。彼等が藩主松平不昧の茶の湯文化を、民衆レベルで理解できたのは驚くべきことであった。それは彼等が繊細な感性の持主だったからである。

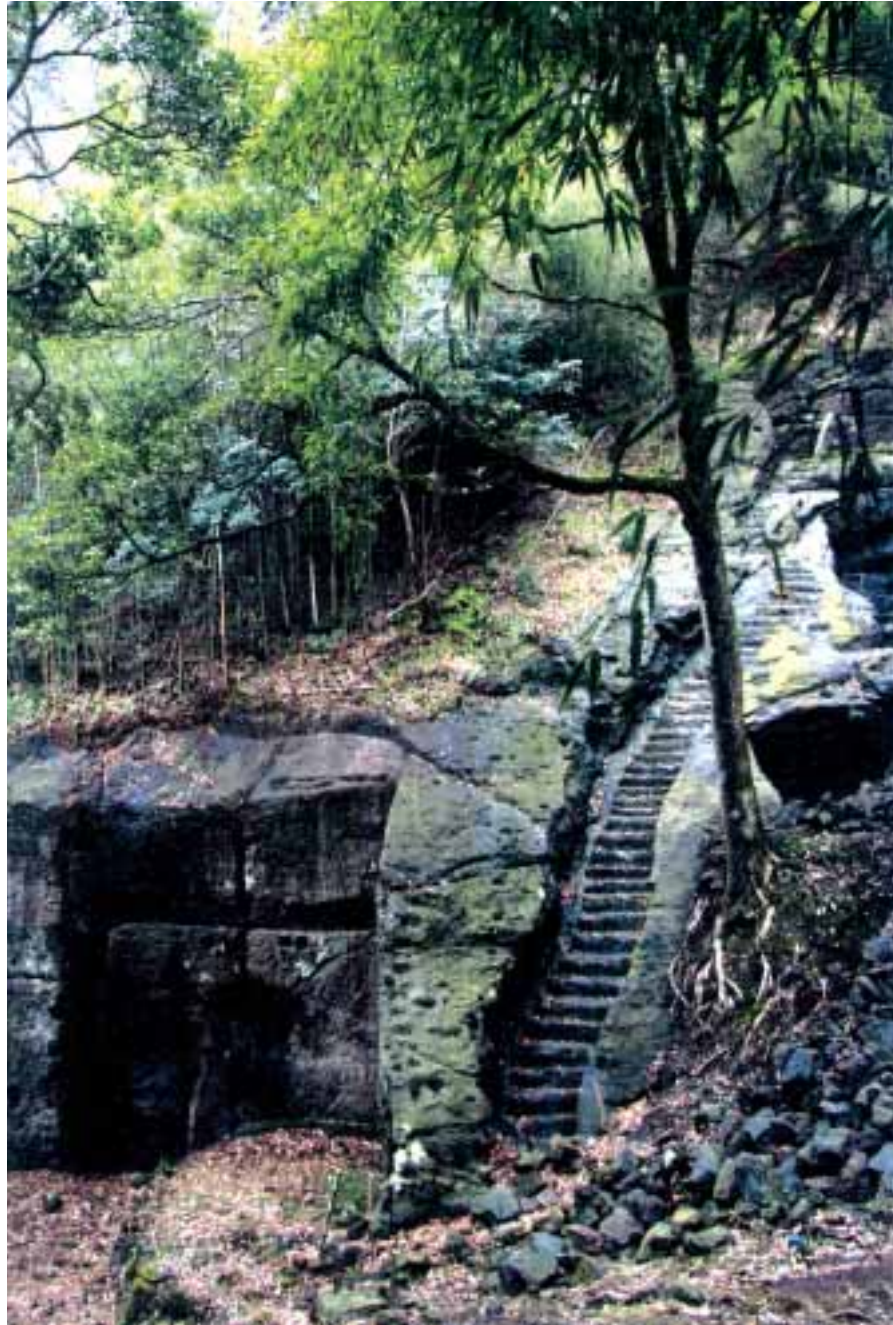
3——一途な石見人

石見には神話らしいものは伝わっていないが、田畑修一郎は前述の著書の中で、自分の故郷石見について次のように言う。「石見のもつ古さは単純だ。それはどこか原住民的な古さがある、時代を経るにしたがって深まり、沈潜し、磨きを加へるといったような古さではない。むき出しであり、古さのままに枯れ、そこに何か頑固な強

さがある、といった風なものだ」。

その頑固さ、一途さは、石見人の心に深々と根をおろしている。素朴な石見瓦や粗陶器を作り続けるのも一途さのせいであり、石見人の美意識とっていい。歴史上の人物を見ても、愚直なまでの一途な生きざまを残した人物をあげることは、さして困難ではない。勝敗を度外視して、大内義隆の叛臣陶晴賢に挑んだ津和野三本松城主吉見正頼、処刑を覚悟で浜田藩財政のために密貿易を行った会津屋八右衛門、本願寺内部の異安心に敢然と理論闘争を挑んだ仰誓と履善、徹底して弥陀の救済を信じた妙好人有福の善太郎と浅原才市など。出雲では捜しだすのに骨が折れる。

このような石見人の気風は、おそらく、単調な自然、生産性の低い土地柄などの影響を受けて形成されたものであろう。石見は決して閉鎖的ではない。生産性が低いゆえに、積極的に外部に出かけていく必要があった。そして、森鷗外・島村抱月・田畑修一郎・伊藤佐喜雄・難波利三など、出雲に比して多くの文学者を生んでいることも、石見の風土と深く関わっているに違いない。



■写真3 徳川家康に献上した銀を産出した石見の釜屋間歩。発掘調査で岩盤を加工した平坦地や階段跡、坑道などが発見された

4——気迫を秘めた隠岐

隠岐は島根半島の北方、約60kmに位置し、4つの大きな島と無数の無人島から成っている。よく、流人の島と呼ばれる。隠岐国が遠流の地と定められたのは、奈良時代の神亀元年(724年)のことである。以来、江戸末期に至るまでに、2,000人を超える流人たちが、配所の月を眺めたのであった。

古代中世の流人たちは、政変に連座した皇族・貴族・僧侶などの政治犯が多かった。遣唐副使を拒否した小野篁、承和の変(842年)の伴健岑、安和の変(969年)の藤原千晴、保元の乱(1156年)の藤原経憲らの名が見

える。しかし、なんととっても、流人の島の名を高からしめたのは、後鳥羽上皇と後醍醐天皇である。

後鳥羽上皇は北条幕府の打倒を企て、挙兵したがあえなく大敗した。承久の乱(1221年)である。そして隠岐配流となり、中ノ島(海士町)源福寺の行在所で、望郷の念にさいなまれながら在島19年、この地で悲愁の一生を終えたのであった。後醍醐天皇も同じように北条討幕の企てに失敗し、隠岐遠島となったが、在島1年で脱出に成功し、建武の中興をなしとげた。隠岐に流された都人たちは、中央文化を隠岐に伝え、今でも神社の風流や言葉などに、都の文化がしのばれる。

近世に入ると、政治犯のほかに殺人や窃盗など刑事



■写真4 隠岐の島前神楽と知夫の海

犯がまじるようになる。それでも、流人の島という呼称には悪い響きは生じなかった。いかなる流人たちも、島の温かい人情にふれて、まっとうな人間に立ち直ったからである。

隠岐の人々は穏和で人情に厚いが、反面、覇気がなく主体性に欠ける点も指摘されている。『人国記』には「風に従ふ草の如く」と記されている。隠岐の人びとの気質は、歴史がそうさせたと言っている。中世以降、隠岐はいつも出雲の従属的立場にあった。隠岐守護は鎌倉時代の一時期をのぞけば、常に出雲守護の兼務であり、守護代の支配が続いた。戦国期には出雲の尼子、安芸の毛利が支配し、江戸時代には幕府天領となった

が、実質的には松江藩の派遣する代官が支配した。

このように、隠岐の人びとは外部の権力支配に甘んじなければならなかった。そのため、権力への順応の道を選んだのである。だが、内奥には厳しい気迫を秘めていた。長い間に鬱積した不満は、極限に至ればマグマとなって噴出する。その具体的な現象が、隠岐騒動と廃仏毀釈である。

慶応4年(1868年)3月、武装した島民3,000人は、隠岐郡代を放逐し、島内に自治をしく。一時は革命運動のような展開であった。続いて翌明治2年には、全島の寺院をことごとく破壊した。国内に例をみないほどの徹底的なものだった。2つの事件の評価は区々であるが、この時示された島民のエネルギーは目をみはるものがあった。

明治25年(1892年)の夏、隠岐を旅したラフカディオ・ハーンは、自然と民情を満喫し「どこまでも伸びていく文明の圧力からのがれているという喜びを感じ」(『伯耆から隠岐へ』『日本警見記』所収)たのであるが、100年後の今日も、ハーンが感じた点は基本的に生きていけると言えよう。

5——島根らしさ

このように、三国ともそれぞれに特色ある歴史、風土、気質気風を形成してきた。この三国を一つに合わせたのが島根県なのである。すでにお分かりのように、このなかから、共通した特徴、つまり島根らしさを引き出すことは無理であろう。もしかすると、それぞれが特色を持ちながら、ゆるやかに結合しているのが島根らしさであるのかもしれない。とすれば、島根らしさを活かすためには、三国を均質化するのではなく、長い歴史と風土の中で培われた特色を失わないことである。ゆるやかに結合した姿こそが、今後の島根県の在り方かもしれない。